

日本と南アジアの仏教交流 カルカッタ大学での山上曹源、木村日紀、増田慈良

リチャード・ジャファイ 著
千葉 聡 訳

私の近著『Seeking Śākyamuni: South Asia in the Formation of Modern Japanese Buddhism』（釈迦牟尼の探求：現代日本仏教の形成における南アジア）で示したとおり、20世紀の最初の3分の1の期間、南アジアでも特にインドは、日本人僧侶にとって重要な交流地帯としての役割を果たした¹。日本人僧侶の世界への働きかけは、南アジア・東南アジアの僧侶・学者との交流によって促進された。彼らは、日本人が英語で著した論文を南アジアで発表することで、日本人が国際的な仏教学会に参加するための機会を提供した。さらに、たとえば『The Young East』のようなアジア全域の僧侶の意見交換の場として機能した日本の英語雑誌は、日本人学者と南アジア・東南アジアの広範囲の仏教学者とを結びつけた。『The Young East』や日本で出版された仏教研究の英語刊行物はこのようにして、アジアで国境を越えて共有される仏教文化を生み出すことに貢献した。同じ時期、世界中から日本を訪れた海外の仏教僧は、日本語の読み書きができない人々に対して日本語教育を広げる日本人僧侶の取り組みを手伝い、そして日本人僧侶のパーリ語、サンスクリット語、チベット語などの言語に関する研究を向上させた。ひとつの事例を示すと、渡辺海旭（1872-1933）が住職を務める深川の西光寺は、『大正新修大蔵経』の編纂作業が行われた場所であり、ニャーナティローカ（Nyanatiloka）、中国僧密林、ラス・ビハリ・ボース（Rash Behari Bose）といった重要人物がしばしば訪れていた²。これらの外国人たちが日本の『大蔵経』編纂にどの程度寄与したのかはまだ完全には調査されていないが、私が『Seeking

¹ 本稿は Richard M. Jaffe *Seeking Śākyamuni: South Asia in the Formation of Modern Japanese Buddhism* (University of Chicago Press, 2019) の一部を修正して抜粋したものである。

² 奥山直司『評伝 河口慧海』中央公論新社、2003。

Śākyamuni』で指摘したとおり、日本は20世紀初頭にアジアの仏教主要国として機能するようになったのである。

アジア諸国間の交流に関わった多くの人々の伝記は、日本人僧侶・仏教学者の下積みの場として、そして日本人の国際的な仏教学会への入口として、インドと東南アジアの重要性を明確に示している。人、思想、物質文化の流れは、さまざまな方向に展開した。南アジアに留学した日本人僧侶の多くは、日本に帰国後、大学教授を務めるだけでなく、日本人とアジアからの来訪者との懸け橋の役割を担った。ほかにも南アジアに長期留学した日本人僧侶は、その地域において日本人旅行者のガイドも務めた。インドで大学講師になって、その地域の仏教研究の復興に貢献した日本人僧侶もいた。あまり知られていないが、20世紀の最初の30年のかなりの期間で、3人の日本人僧侶がカルカッタ大学 (University of Calcutta) で仏教学の講義を行っている。

カルカッタ大学で講義をした最初の日本人僧侶は、曹洞宗の山上曹源(天川) (1878-1957) である³。山上は1906年、曹洞宗大学(後の駒澤大学)を卒業し、曹洞宗海外研修生としてインドに渡った。山上はカルカッタ大学に留学する前、最初にコロンボで1年間、高名なスリランカ僧ヒカドゥベ・スマンガラ (Hikkāḍuvē Sumaṅgala) からサンスクリット語を教わった。カルカッタ大学では、英語、サンスクリット語、インド哲学、文学を学んだ。山上は、インドにおけるパーリ語研究の復興に興味を持っていたハリナス・デー (Harinath De) と一緒に研究をした。デーはカルカッタのプレジデンシー大学 (Presidency College) で英語教授を務めた後、カルカッタ大学に移り、そこで言語学部の創設メンバーの1人となった。インド僧であり仏教学者の草分け的なダルマナンド・コサンビ (Dharmanand Kosambi) の指導のもとで、デーはパーリ語の研究を進めた⁴。デーはそのキャリアにわたって、『楞伽経』テキストの編纂、ターラナータ (Tāranātha) 『印度仏教史 (Rgya gar chos 'byung)』シリーズの翻訳出版を含め、さまざまな仏教文献の編纂と翻訳を行った。山上は、旧テキストの龍樹『中論』

³ 山上の姓は、Yamagamiとも表記されるが、山上の英文の研究論文 *Systems of Buddhist Thought* と、禅学大辞典編纂所『禅学大辞典』第2版(大修館書店、1985、p.1238)における表記に従い、本稿ではYamakamiと綴った。

⁴ Kosambi, Dharmananda, and Meera Kosambi. *Dharmanand Kosambi: The Essential Writings*. (Ranikhet, Bangalore: Permanent Black, 2010), pp.187-89.

と提婆達多の注釈書の選集翻訳作業でデーを手伝った⁵。提婆達多の注釈書の一部は漢籍のみが現存し、東アジアの詳細な注釈文化によるものと考えられると、これらの文献に関する研究において、山上はデーにとって貴重な助手だっただろう。

山上は1910年、カルカッタ大学の副総長で大学院評議会議長のアシュトシュ・ムーケルジー (Ashutosh Mookerjee) (1864-1924) によって仏教学の准教授に任命された⁶。ムーケルジーは1906～1914年に、そして再び1921～1923年に大学の副総長を務め、それと同時に1911～1924年には大菩提会 (Mahābodhi Society) の会長を務めた⁷。ムーケルジーは、ベンガル仏教協会 (Bengal Buddhist Association) の活動とその創設者クリパサラン・マハテラ (Kripasaran Mahathera) との密接な取り組みに触発され、大学でパーリ語と仏教を研究する学者仲間を集めることに尽力した。20世紀初頭の期間にわたって、学問的な素質と仏教への信仰を持ちあわせた有能な裁判官でもあったムーケルジーは、ベニ・マドゥハブ・バルア (Beni Madhab Barua) やダルマナンド・コサンビといった著名なインド人仏教学者を雇った。ムーケルジーの在任中に、カルカッタ大学はインドで最初のパーリ語学部を設立した。

山上はカルカッタ大学での在任中、仏教教義の展開についての講義を担当した。また、カルカッタ大学の出版部を通じて、授業用の教科書として講義内容の書籍を出版した。研究論文『Systems of Buddhistic Thought』の序文で、山上はデーとムーケルジーに謝辞を述べ、「私が最も重要だと考えているインドの学問に横たわっている問題、すなわちサンスクリット語の原典が失われ、いまや中国語とチベット語の訳本が見つかった原始仏教文献を再発見するためには、彼 (デー) の言語の才能が計り知れな

⁵ Sunil Bandyopadhyay, *Harinath De, Philanthropist and Linguist* (New Delhi: National Book Trust, India), 1988, pp.54-56.

⁶ Sōgen Yamakami, *Systems of Buddhistic Thought* (Calcutta: University of Calcutta, 1912), iv.

⁷ Douglas Fairchild Ober, "Reinventing Buddhism: Conversations and Encounters in Modern India, 1839-1956" (PhD, Asian Studies, University of British Columbia, 2016), p.174. オベル (Ober) によると、ムーケルジーは1915～1921年には会長を務めていないが、木村は1920年の著書の序文で「ムーケルジー会長」と言及し、支援への感謝を述べている。Ryukan Kimura *The Original and Developed Doctrines of Indian Buddhism in Charts* (University of Calcutta, 1920, v 頁) を参照。

いほど貴重であることを証明しただろう」と評している⁸。山上は1913年までカルカッタ大学で教鞭をとって日本に帰国した。1914年、曹洞宗大学の教授になり、サンスクリット語、インド宗教、仏教学を講じた。南アジアの長期留学から帰国した多くの僧侶のように、山上は仏教に関する論文を執筆することに加えて、インドの状況についても著述した。たとえば、インドの社会生活、政治、軍事、宗教生活を概説した『今日の印度』を1915年に出版した⁹。山上は曹洞宗の高等教育分野で出世し、1943～1945年には駒澤大学の学長を務め、その間、禅と戦争運動を支持する研究発表を続けた¹⁰。

山上が南アジアに到着した2年後、続いて木村日紀(1882-1965)が亜大陸に渡った。福井県に生まれた木村庄三郎は、1896年に日蓮宗の僧侶として得度して“竜寛”と呼ばれていたが、1931年に“日紀”に改名した¹¹。木村はいくつかの宗門学校と英語学校で学んだのち、1906年に東洋大学に入学した。1908年、東洋大学の予科と学部1年を修了し、日蓮宗の海外留学生としてインドに渡航した。木村は最初、19世紀までのインドでは数少ない、非常に多くの仏教徒がいる都市のひとつであるチッタゴンにて、サンスクリット語学校で学んだ。「私は仏教を学ぶために留学生としてインドに渡り、チッタゴン——インドに残っていた唯一の南伝仏教(小乗仏教)の中心地——に住んだ」と木村は振り返る¹²。19世紀半ば、チッタゴンはインドの仏教復興運動の中心地となり、アラカン族の僧侶サラミトラ・マハスタヴィル(Saramitra Mahasthavir)が1885年にサングハラージャ・ニカーヤ(Sangharāja Nikāya)を設立した¹³。木村は1911年、チッ

⁸ Yamakami, *Systems of Buddhist Thought*, v.

⁹ 山上曹源『今日の印度』玄黄社、1915。

¹⁰ 経歴は山上貞編『遂浪随波』(神奈川新聞社、1957、pp.217-221)に掲載されている。15年の戦争の間に、山上は日本の犠牲的精神と忠誠心を鼓舞する著作を少なくとも1冊出版した。山上曹源『葉隠武士の精神』(三友社、1942)を参照。

¹¹ 経歴は木村日紀『法華経講話：日蓮聖人と法華経』(1966、pp.97-99)と日本仏教人名辞典編纂委員会編『日本仏教人名辞典』(法蔵館、1992、p.162)の年表に基づいた。

¹² Nikki Kimura, “My Memory about the Late Rash Behari Bose,” in *Rash Behari Basu, His Struggle for India's Independence*, ed. Rash Behari Bose, Radhanath Rath, and Sābitri Prasanna Chatterjee (Calcutta: Biplabi Mahanayak Rash Behari Basu Smarak Samity, 1963), p.38.

¹³ 多くの重要なインド人仏教学者や僧侶を生みだしたチッタゴンの仏教復興について

タゴンのサンスクリット語学校を修了してカルカッタへ移り、1914年までサンティニケタンにあるタゴール・センター (Rabindranath Tagore's center) の司書ビドゥシュクハル・シャストリ (Bidhushekhar Shastri) (1878-1957) から教えを受けた。木村はまた、サンスクリット大学 (Sanskrit College) のアジア研究学科でも学んだ。1914年に卒業すると、ハラプラサド・サストリ (Haraprasad Śastri) から仏教サンスクリット語と古代インド碑文を教わった。サンスクリット語を習うだけでなく、木村はインド語派言語と同様にベンガル語にも堪能になり、1915年には中観派哲学についての研究論文がベンガル文学協会 (Literary Association of Bengal) から金賞を受賞し、東ベンガル・サンスクリット学会 (Eastern Bengal Sanskrit Society) からヴィドゥヤ・ラタナ (Vidya Ratna) の称号を受けた。

木村はベンガルにいる間、1901～1902年にその地域に滞在した岡倉覚三のように、ベンガルの高名な詩人で知識人のラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore) (1861-1941) の活動に引き込まれた。タゴールは1915年に訪日の計画を立てると、まだカルカッタ大学にいた木村に手紙を書き、日本に戻って彼の日本滞在の準備をしてほしいと頼んだ。タゴールは次のように書いた。

日本にすぐ出発するのではなく、数ヶ月待つつもりです。その間、あなたに日本に行ってもらい、必要な準備をしてほしいのです。私は、日本における現代社会の表面的な兆候と、伝統的な過去の精神について知りたいです。また、日本の文明のなかに古代インドの痕跡をたどりたく、可能であれば日本文学についての知見も得たいです。あなたは、私が日本にいる間、さまざまな招待、歓迎会、公式会議のプレッシャーから私を守ってくれると信じています。私はとても質素に、静かに過ごしたいのです¹⁴。

ては次を参照。Gitanjali Surendran, "The Indian Discovery of Buddhism': Buddhist Revival in India, c. 1890–1956." (PhD, History, Harvard University, 2013), pp.125–26; and Ober, "Reinventing Buddhism", pp.120–28.

¹⁴ 手紙は次を引用した。Stephen N. Hay, *Asian Ideas of East and West; Tagore and His Critics in Japan, China, and India*, Harvard East Asian Series. (Cambridge: Harvard University Press, 1970), p.53.

タゴールの訪日は、英国当局の警戒心を強めさせた。理由のひとつとして、1915年に独立運動家ラス・ビハリ・ボースがタゴールの親族と偽って日本に逃れたことがあるだろう。それに加えて、タゴールが乗った日本行きの船、土佐丸は以前、ベンガルの独立運動グループによって、インドへの武器の密輸に使われていた¹⁵。インドにおいて英国の国益に反する行為をしていると嫌疑をかけられた日本企業の役員や出張者と同様、木村もインド人の同僚を含めた一部の人たちから日本のスパイと見られていた¹⁶。

タゴールの要請により、木村は1915年、滞在の準備を手伝うため日本に戻った。その詩人の訪日は、アメリカ合衆国へ向かう途中の一時寄港として実現した。1916年6月13日のタゴールの公式歓迎会で、木村は寛永寺に集まった僧侶、政府高官など約250人にタゴールの言葉をベンガル語から日本語へ通訳した。木村は日本にいた2年間で、ウパニシャッド哲学に関する著作『優波尼沙土物語』を出版し、日蓮宗の権僧都の僧位に昇格した¹⁷。彼はまた、その時期に東京で身を潜めていたラス・ビハリ・ボースに初めて会った。東京でボースと出会った後、木村は感銘を受けて、「私は彼の誠意に最大の敬意を払い、本物の心の高貴さを知った。対談した後、私は彼の親友になった」と振り返っている¹⁸。

木村は、宗門から許可を得て1917年までにインドに戻り、ハラプラサド・サストリのもとでインド仏教史を学んだ。翌年、木村はカルカッタ大学の人文科学系の大学院で講義を開始し、同大学で仏教思想を教える2人目の日本人僧侶となった。木村にはインド仏教史と大乘哲学の講師の肩書が与えられた。同大学で木村は「仏教哲学と仏教史」を教えた。カルカッタ大学は1924年、日本のすべての大学と関係を構築するため、木村を日本に送り戻した。木村はまた、カルカッタ大学のさまざまな出版物で日本の主要な大学を紹介した¹⁹。

カルカッタ大学で教鞭をとっている間、木村は南アジアの仏教に関す

¹⁵ Hay, *Asian Ideas of East and West*, p.56.

¹⁶ ヘイのこの主張は、1960年のカルカッタ大学の元職員とのインタビューに基づく。「木村はカルカッタに滞在している間スパイだと噂されていた」とその人物が述べている。Hay, *Asian Ideas of East and West*, p.347.

¹⁷ 木村竜寛『優波尼沙土物語』新潮社、1916。

¹⁸ Kimura, "My Memory about the Late Rash Behari Bose," p.40.

¹⁹ Kimura, "My Memory about the Late Rash Behari Bose," p.40.

る一連の論文と著書を日本語と英語で執筆した。木村が帰国前に発表した日本語の著作のほとんどは、宗派の機関誌においてインド仏教を解説した論文である²⁰。先述したとおり、木村は1916年にはウパニシャッドに関する本も出版している。木村の英語の著作は、講義内容に基づいた実質的なもので、カルカッタ大学が出版した。これらの出版物のいくつかの序文で、木村はアシュトシュ・ムーケルジーの支援的な指導に対して謝辞を述べ、ベニ・マドゥハブ・バルア (B. M. Barua) とサイレンドラナス・ミトラ (Sailendranath Mitra) といったインド人同僚、さらに木村の生徒、特に大学院生のサポートに感謝の念を示している²¹。木村の著作として、『The Original and Developed Doctrines of Indian Buddhism in Charts』(1920)、『Introduction to the History of Early Buddhist Schools』(1925)、『A Historical Study of the Terms Hinayāna and Mahāyāna and the Origins of Mahāyāna Buddhism』(1927) などがある。これらの著作のうち、少なくとも『Introduction to the History of Early Buddhist Schools』は、木村が複数の図書館に配本しており、その署名本が今日まで所蔵されている²²。

木村はこれらの著作を、小乗、大乘という用語の使い方を明確にしながら、インド仏教の多様な宗派と教義との関係を体系的な手法で示すための統一した取り組みと考えた。19世紀後半に欧州式の仏教学が日本に浸透して以来、日本人は東アジア仏教——いわゆる“北伝仏教”——が伝承に対して迷信的な改ざんを反映させたもので、釈尊の本来の教えから逸脱しているという認識と向き合ってきた。ペレイラによると、パーリ語文献の教えに基づく仏教の流れと、中国語またはチベット語の文献を基礎とする仏教の流れとの関係について、釈宗演のような日本人僧侶が世界的な議論を引き起こしたという。ペレイラは次のように述べている。

²⁰ たとえば、木村竜寛「インド見聞談」『法華』2 No.5 (1915年5月)、「日蓮主義を知る前に法華経を知る可し、日蓮聖人を知る前に仏陀を知る可し」『法華』7 No.3 (1920年3月)。

²¹ 例として以下を参照。

Ryukan Kimura, *A Historical Study of the Terms Hinayāna and Mahāyāna and the Origin of Mahāyāna Buddhism* (Patna: Indological Book Corp., 1978), originally published 1927, xi-xii.

²² 別々の署名本が東京の駒澤大学図書館とシカゴ(イリノイ州)の研究図書館センターにある。

上記の研究結果（仏教を“南伝”と“北伝”の宗派で区分すること）の意味合いの帰結と直接的な反応として、1870年代初頭、明治時代の日本で仏教に関する新しい歴史認識が現れ、日本人の仏教研究へのアプローチ方法を根底から変えただけでなく、世紀の変わり目までに日本の仏教それ自体に新しい概念化をもたらした。同時期以降、アジアと西洋で仏教の研究と概念化が行われたことが、用語の再定義に大きく影響を及ぼし、直接的な原因となった²³。

ペレイラは、小乗と大乘に関するこれらの思想が日本から欧州、米国に伝わった一因として、万国宗教会議での日本代表団の演説とその後の釈宗演と鈴木大拙による英語の著作の重要性を指摘している。たとえば、鈴木『*Outlines of Mahayana Buddhism*』（1907）は草分け的な作品である。さらに、日本における英語の仏教刊行物、特に『*The Mahayanist*』と『*The Eastern Buddhist*』は、日本の大乘の流派に対するより好意的な見方を広めようとした。インドで発表された木村の研究はすべて、山上曹源と増田慈良と同様に、日本人の仏教史観を英語圏の人々に広めるための試みの一部として理解することができる。その過程で木村は、講義を通じて日本人の大乘観を新しい世代のインド人仏教学者に教えることができたし、その一方で、インドで発表された英語の論文を通じて日本以外の仏教学者に向けて発信することができた。『*Journal of the Pali Text Society*』やその他の機関誌での日本人学者の発表に加えて、インドの学術誌は、日本国外の幅広い人々に発信するための重要な場となった。

木村の『*A Historical Study of the Terms Hinayāna and Mahāyāna and the Origins of Mahāyāna Buddhism*』に対して、複数の著名な英国人学者が注目し、その内容に難色を示した。ウィリアム・ステード（William Stede）はある論評で、木村のパーリ仏教の理解が不十分だと批判し、それは大乘仏教の本質を正確に理解するために不可欠な土台であると綴った。ステードは「パーリ語の研究をもっと徹底的に」取り組むよう木村にうながし、「この点に関するいくつかの有望な研究は日本人仏教学者の

²³ Todd LeRoy Perreira, “Whence Theravāda? The Modern Genealogy of an Ancient Term.” In *How Theravāda is Theravāda?: Exploring Buddhist Identities*, edited by Peter Skilling, et. al., pp.443–571. (Chiang Mai, Thailand: Silkworm Books, 2013), p.458.

“中間世代 (middle generation)” によって行われている」ことを認め、「数人のインド人と西洋人がそれに加わることを私は願っている」と述べている²⁴。釈尊の成道後の悟りにおける暗黙的な“存在論”の教義の表現として大乘を特徴づけることによって、小乗と大乘の仏教の派生関係を後年の視点から説明しようとした木村の試みは、キャロライン・リース・デイビッツ (C. A. F. Rhys Davids) からの批判の火種となった。その批評家は、小乗と大乘の関係についての木村の詳細な系図を称えながらも、次のように反論した。

とりわけ彼はインドでパーリ語を教えていて、インド仏教学の低階層を取り上げている。そして彼は大乘仏教徒の立場からアプローチしている。あるいは少なくとも彼自身の立場からではあるものの、大乘仏教の流派の支配的な影響下にある。これはまさに、インド仏教学の始まりを純粹、客観的な史実に基づいて論評するにあたって、スポーツの世界では“失格”と分類されることに取り組んでいるようなものである²⁵。

しかしながらキャロライン・リース・デイビッツは、スティードのように、木村の主張の一部に異議を唱えたにもかかわらず、木村の取り組みの価値を認めた。「この論文とその歴史的価値の本質は、小乗と大乘という用語がどのように発生したかの詳細な調査にある。完璧な用語と向き合わなければならぬ読者は、その用語についてどれだけ知られていて、どれだけ知られていないかを学ぶ機会がここにあり、そして読者の前にある徹底した研究調査に対して感謝すべき理由がわかるだろう」²⁶

1929年、木村は日本に帰国して立正大学の教授職に就いた。正式には1931年までカルカッタ大学での役職から外れていなかったが、それまで

²⁴ W. Stede, “Review of a Historical Study of the Terms Hinayāna and Mahāyāna and the Origin of Mahāyāna Buddhism by Ryukan Kimura,” *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* 4 (1928): p.952.

²⁵ C. A. F. Rhys Davids, “Review of a Historical Study of the Terms Hinayāna and Mahāyāna and the Origin of Mahāyāna Buddhism by Ryukan Kimura,” *Bulletin of the School of Oriental Studies* (London) 4, no. 4 (1928): pp.856–57.

²⁶ Rhys Davids, “Review of a Historical Study,” p.857.

に木村は立正大学の専門部部長と日蓮宗の大僧都の僧位になっていた²⁷。木村は英語での研究発表を多少は続けたが、日本への帰国にともなって研究の大部分が日本語になった。これらの研究で木村は、インド思想に関する多くの研究と同様に、日蓮の仏教を理解するために必要だと考えられる基礎知識を示すことに重点的に取り組んだ²⁸。1938～1941年の記録によると、木村は立正大学でサンスクリット語上級、インド哲学、インド仏教史・哲学、法華経の授業を担当した²⁹。

木村は帰国後、立正大学での講義を受け持つだけでなく、1933年に設立された国際仏教協会の常任理事に就任した³⁰。仏教の国際的な普及を促進するために設立された同協会は、日本語の機関誌『海外仏教事情』と、世界の読者に向けた2種類の英語シリーズ『Young East』と『Studies on Buddhism in Japan.』を発行した。同協会の使命を推進するため、会員は海外仏教に関する情報を収集し、翻訳作業を行い、海外仏教を学ぶ学生を支援した。中国で全面的な戦争が勃発した最中の1937年、木村は同協会の代表常任理事に就任した。

木村は立正大学で講義し、国際仏教協会の理事を務めながら、来日する南アジアの仏教僧侶の仲介役も務めた。1930年代半ばに、木村がプーレ(V. E. P. Pulle) (後のソーマ・テラ(Soma Thera))とプレリス(G. S. Prelis) (後のケミンダ・テラ(Kheminda Thera))を立正大学に連れてきたのは、おそらく国際仏教協会の役員という立場によるものだろう。木村はスリランカ人のプーレとプレリスを立正大学に受け入れ、学生の江原亮瑞を紹介した。後にスリランカ僧は、江原の寺である長崎県川棚町の常在寺を訪れ、そこで江原と共に『解脱道論』を英訳した。

スリランカ人がいつ日本に来たのか明確ではないが、1935年までに立正大学の活動に関わるようになったのは明らかで、その年にプーレが立正

²⁷ Kimura, *Hokekyō kōwa*, p.98.

²⁸ たとえば、木村竜寛「印度の祭祀儀礼に就て」『大崎学報』78 (1930, pp.74-80)、木村竜寛「根本仏教より法華経まで」『大崎学報 日蓮上人六百五十遠忘記念特輯号』(1931, pp.229-302)、木村日紀「大乘小乗といふ名義の歴史的研究」『大崎学報』81 (1932, pp.76-114)、木村日紀「阿育王の教法」『大崎学報』83 (1933, pp.113-140)、木村日紀『印度現代思潮』(岩波書店、1935)。

²⁹ 日本の大学で開講されている仏教科目は、国際仏教協会がリストアップしている。国際仏教協会編 *Studies on Buddhism in Japan* 4 巻、国際仏教協会、1939～1942。

³⁰ 大澤広嗣『戦時下の日本仏教と南方地域』法蔵館、2015、pp.60-64。

大学の学術誌でセイロン仏教についての大まかな英語論文を発表している³¹。論文の結びでプーレは、インドとセイロンで研究した多くの日本人と同様に、アジアの未来のための仏教の重要性を指摘した。「また、セイロンの歴史、民族、重要な考古学的遺物の研究は、未来の宗教を適切に理解するために不可欠である。仏教、それは我々のアジアをこれまで偉大に、崇高に、屈強にしてきたが、今後ますます偉大に、崇高に、屈強にしていくだろう」³²。2人のスリランカ人のほかに、ベンガルの仏教僧ラストラパーラ・サンディリヤーヤナ (Rastrapala Sandilyāyana) も立正大学の木村のもとで学んだ。サンディリヤーヤナは『Young East』に論文を発表したほか、小冊『A Short History of Japanese Buddhism』を国際仏教協会から出版した³³。

カルカッタ大学は、山上と木村と同様に、長期留学していた新義真言宗の僧侶、増田慈良 (1887-1930) を専任講師として雇用した。増田は、真言宗系統の豊山大学から留学生として派遣され、1912年の冬に河口慧海と高楠順次郎と同行してインドとネパールの仏教地を巡った³⁴。増田はバローダとプネーで学んだ。そこでは、バローダ藩王国の藩主サヤージーラーオ・ガーイクワード3世 (Sayajirao Gaikwad III) が仏教学とサンスクリット語の研究を熱心に支援していた³⁵。増田がプネーとバローダ(現在のヴァドーダラー) にいた時期は、バンダルカル (R. G. Bhandarkar) (1837-1925) や、藩主によりカルカッタ大学からバローダ藩国に招聘されたダルマナンダ・コサンビといった卓越した仏教言語学者が、サンスクリット語とパーリ語の研究を推し進めていた。増田がバローダとプネーにいた6年の間に、コサンビはプネーのファーガソン大学 (Fergusson College) でパーリ語を教え、バンダルカルはボンベイ大学 (Bombay University) の副総長としてパーリ語をカリキュラムに導入した。さらに、デカン教育協会 (Deccan Education Society) は、ファーガソン大学でパーリ語を学ぶ学生のために

³¹ V. E. P. Pulle "Buddhism in Ceylon" 『大崎学報』 87、1935、pp.2-6。

³² Pulle "Buddhism in Ceylon," p.6.

³³ Rastrapala Sandilyayana *A Short History of Japanese Buddhism* 国際仏教協会、1940。

³⁴ これらの伝記の詳細は、奥山直司『評伝 河口慧海』(p.238, 270) で増田が随所で述べていることを引用した。

³⁵ インドでの増田の詳細は、泉芳璟「明治時代に於ける渡印の仏教徒」『現代仏教』105 (1933、p.168) に記されている。

4種類の奨学金を提供した³⁶。オベルの記述によると、1913年、“日本人来訪者”が贈呈した日本の仏像を、藩主が鳴り物入りで設置した³⁷。オベルはその来訪者の名前を記していないが、その出来事は増田がプネーとバローダで学んでいる間に起こっているため、おそらく増田が藩主へ仏像を贈ったのだろう。ともかく、増田のプネーとバローダの在住時期は、その地域における仏教研究の開花と重なった。南アジアに留学した多くの日本人僧侶の事例を見てきたとおり、ベナレス、ボンベイ、カルカッタのような主要都市圏に加えて、バローダ、チッタゴン、プネーと、一見すると行き先がばらばらに見えるが、ダス、デー、コサンビ、その他のインド人学者が先導してインド仏教研究の復興が進行していた中心地の一覧になっていることがわかる。

1918年、増田はカルカッタに移り、同じ時期に木村日紀が講師をしていた大学の大学院で、古代インド史・文化の講師になった。増田はカルカッタ大学での在職中に、バスマトラ(世友)『異部宗輪論』を英訳して発表した。それは、多くの部(派)形成をもたらした初期仏教団の分裂の歴史が詳述された、現存する貴重な漢籍文献である。その文献に関する増田の初期の研究は、カルカッタ大学の文学部の機関誌に掲載されたが、日本で増田の義父が亡くなったため、英訳を完成させる前に1921年にインドを去ることを余儀なくされた。増田の没後に出版された随筆集にあとがきを寄せた石上善応によると、「インドでの10年間の留学は増田先生に大きな影響を及ぼした。おそらく、なににもまして、インドの土壤に触れ、インドの多様な民族の習慣を直接体験し、生のインド社会の複雑さを学ぶことができた。1、2年の短期間の留学とは異なり、彼はインド事情の外側と内側を完全に知るまでに至ったと言っても過言ではない」という³⁸。

増田は続いて1921年から1925年にかけてドイツのハイデルベルクに留学し、マックス・ワレーザー(Max Walleser)と共に研究をした。増田はドイツで『異部宗輪論』の英訳を完成させ、『Asia Major』で発表した³⁹。

³⁶ バローダ藩主の活動については、Ober “Reinventing Buddhism,” pp.78-79, 284-285 を参照。バローダでのコサンビのパリ語推進活動については、Kosambi “Dharmanand Kosambi,” pp.6-7, 22-23, 199-205 を参照。

³⁷ Ober “Reinventing Buddhism,” p.284.

³⁸ 大正大学出版部編、増田慈良『インド仏教史論』大正大学、1986、p.235。

³⁹ Jiryō Masuda, “Early Indian Buddhist Schools,” *Journal of the Department of Letters, University of Calcutta* 1 (1920): 1-11; and “Origin and Doctrines of Early Indian Buddhist

さらに増田は、瑜伽行派に関するドイツ語の論文を発表した。1927年、マックス・ワレーザーは『異部宗輪論』のドイツ語訳を発表し、それによってその重要な研究がヨーロッパで広く利用できるようになった⁴⁰。1925年、増田は日本に戻り、設立されたばかりの大正大学の教授職に就いた。大正大学で増田は、荻原雲来と共に梵文学研究室も担当した。国内よりも海外での研究発表で名が知られていた増田は、大正大学でわずか5年間教授を務めて1930年に急逝した⁴¹。

山上、木村、増田は、インドに留学した日本人僧侶が帰国後、主に1920年代に設立された仏教宗派系大学の教授職に就いた3つの事例にすぎない。その時期は、日本の高等教育ブームの一環で、大谷大学（1922）、龍谷大学（1922）、立正大学（1924）、駒澤大学（1925）、大正大学（1926）、高野山大学（1926）が設立された⁴²。インド、セイロン、その他の南アジア・東南アジア各地に長期留学し、帰国後に日本で教授になって、20世紀の仏教研究の形成に貢献した人が数多くいた。本稿と『Seeking Śākyamuni』で言及した人々——河口慧海、木村日紀、山上曹源、増田慈良——だけでなく、南アジアの長期留学を経て日本の大学で教えるようになった日本人僧侶には、赤沼智善（1885-1937）、青木文教（1886-1956）、長谷部隆諦（1879-1928）、織田得能（1860-1911）、大宮孝潤、多田等観（1890-1967）、寺本婉雅（1872-1940）といった著名人が含まれる。

シリーズとして一時的に刊行された『Studies on Buddhism in Japan』が、1938～1941年の間に日本の主要大学で開講された仏教関連の講義をリス

Schools: A Translation of Hsüan-Chwang's Version of Vasumitra's Treatise," *Asia Major* 2 (1925): pp.1-78.

⁴⁰ Max Walleser, *Die Sekten Des Alten Buddhismus. His: Die Buddhistische Philosophie in Ihrer Geschichtlichen Entwicklung* (Heidelberg: C Winter, 1927).

⁴¹ 大正大学出版部編、増田慈良『インド仏教史論』大正大学、1986、pp.235-237。

⁴² 大正時代と昭和初期の日本の高等教育ブームについては、Frederick R. Dickinson *World War I and the Triumph of a New Japan, 1919-1930. Studies in the Social and Cultural History of Modern Warfare* (Cambridge University Press, 2013, pp.48-49) を参照。仏教宗派系大学システムの形成と、日本の20世紀の仏教研究成立におけるインドと南アジア研究の役割については、Makoto Hayashi (林淳) "The Birth of Buddhist Universities," pp.11-29, Makoto Hayashi (林淳) "Religious Studies and Religiously Affiliated Universities," *Modern Buddhism in Japan* (Nanzan Shūkyō Bunka Kenkyūsho (南山宗教文化研究所)、2014, pp.163-193) を参照。

トアップしている⁴³。本稿で言及した人たちが、サンスクリット・チベット語、インド仏教教義、インド哲学などの多様な講義、そしてサンスクリットなどインド語派言語の仏教文献に特化した講義を担当していたことを、このリストが示している。日本人僧侶の南アジアでの長期留学が、20世紀の日本の仏教教育に重要な痕跡を残したことは明らかである。

もちろん、主な海外研究を欧州で行った日本人僧侶のグループもあり、例として数名の名前を挙げると、南条文雄（1849-1927）、荻原雲来（1869-1937）、高楠順次郎（1866-1945）、姉崎正治（1873-1949）がいる。日本の仏教研究の発展と仏教の実践における彼らの影響力——その多くは仏教宗派の事情に関係していた——は非常に大きかったものの、南アジア、特にインドが、南アジア仏教の専門知識を日本に広めるための重要なパイプ役を果たしたことも同様に心に留めなければならない。この点に関して、日本の大学におけるサンスクリット語とパーリ語の研究の普及を、欧州発の“欧州式仏教学”の普及にのみ起因すると説明する見方には気をつける必要がある⁴⁴。少なくとも、“印度哲学”または“印度学”として知られるようになった日本の新興分野の多くの学者は、インド、南アジア・東南アジア各地で学び、そこで古典的インド語派の言語知識と植民地体験について現地の視点を吸収した。もし日本の仏教研究がシルヴァン・レヴィ（Sylvain Lévi）、マックス・ミュラー（Max Müller）、マックス・ワレーザーといった学者に借りがあるとすれば、ハラプラサド・サストリ、ハリナス・デー、ベニ・マドゥハブ・バルアといった南アジアの学者に負うところも大きい。

日本人僧侶が漢籍でのみ現存するインド語派の文献を英訳して広めた一連の作業は、20世紀の仏教研究の学問が世界を循環する性質があることを鮮明に示している。たとえば、増田はインドで、さまざまなインド語派の仏教言語に少なくともある程度は精通し、インド人学者と一緒に研究をした。それらのインド人学者の何人かは、ダルマナンド・コサンビのように、欧州と米国でも研究をしている人だったかもしれない。カルカッタ大学の機関誌はそのとき、日本人学者の研究をインドと世界の英語圏の読者に届ける場として機能した。インドで研究と指導を行って数年を過ごし

⁴³ 国際仏教協会編 *Studies on Buddhism in Japan* 1 巻（1939、pp.207-215）、2 巻（1940、pp.186-196）、3 巻（1941、pp.155-164）、4 巻（1942、pp.139-155）

⁴⁴ Hayashi, “The Birth of Buddhist Universities,” p.16.

た増田は、その後ドイツを訪れてマックス・ワレーザーと共に研究をしており、おそらく彼に影響を与えている。同様に、赤沼智善と立花俊道のような日本人僧侶は、欧州での研究に入る前に南アジアで十分な期間の下積みをしたことで、学問的な専門知識を高め、インド語派言語研究の2つの異なる手法に触れることができた。これらの学者は、シナ語派の仏教文献とインド語派の原典との関係性を日本の大乘観から理解して深めることによって、欧州において仏教学の知識を形成した。このようにして、人、文献、思想の世界的な移動が、ベルリン、パリ、東京、カルカッタ、コロンボにおける仏教研究と接触して、広範囲にわたって影響を及ぼしたのである。